

マサチューセッツ見聞録 「ボストンの風に吹かれて」

畑 山 浩 昭

ボストンに来てからもうすぐ半年。マサチューセッツ工科大学で研修中。通称エム・アイ・ティーと呼ばれるこの大学は、技術や革新ということばで象徴される先駆的な大学。ここに来ている学生や研究者、教職員達も世界中から集まっていて、大学自体がコスモポリタン。縦横に織り込まれる異言語や異文化がキャンパス内に独特の空間を形成している。

エム・アイ・ティーは6つのスクールやカレッジを有する総合大学。特に数学的なアプローチを駆使して学究に取り組むイメージが強い。ちなみに建物や講義には、すべて番号がついている。私がよく行く建物は、5 1や5 2。参加する授業は1 5で始まる5桁の数字といった具合。

教授陣は授業で方程式を多用する。おまけに彼らは多国籍なので、喋る英語も多種多様。使用する語彙や文のパターン、発音も自分流だが、ジョークのスタイルも千差万別。そんな英語や数学が、エム・アイ・ティーのお家芸であるイノベーション（技術革新）と合い重なり、大学としての強烈なイメージを作り上げる。

エム・アイ・ティーは、ケンブリッジに位置する。すぐ近くにハーバード大学もあるので、学生や教職員を始めとする大学関係者が数多く居住する街。通りを歩くと、衣食住にわたり、学生向けのショップが多い。また、学術観光都市と言われるだけあって、毎日観光客でごった返している。そんな環境の中、流行り廃りはあまりなく、みんなそれぞれ自分のスタイルで生活している。

ここにいるといろんな人に出会う。日本からも、大学や研究機関、企業から研修に来ている人が数多くいるが、その目的や期間も様々。教えに来ている人、学びに来ている人。短期の人、長期の人。

最もよく会うタイプの日本人は、企業から派遣されてビジネススクールに研修留学している人々。エム・アイ・ティーにはスローンスクール、ハーバードには、ケネディービジネススクールがある。会社では特定の仕事をしてきた人たちが、ここに来てビジネスの総合的な仕組みやこれからのビジネス戦略を学んでいる。金融、製造、貿易、サービス、政府など、

出身産業も様々だが、ストラテジーやマネジメント、マーケティング、アカウンティングなど、ビジネスの共通言語を修得しながらグローバルな環境の中で自分たちのビジネスを維持、成長させるべく、勉強している人々だ。

日本人以上に会えるのは、世界各国から来ている大学院生や研究者など。出会った人の国籍を数えると、25カ国以上になる。多いのはインドやブラジル。ブラジルはサッカーやオリンピックなどの世界的な大会の会場になることや、環境、エネルギーの分野で開発が進んでいることもあって、国をあげて盛り上がっているようだ。インドは先進的な知識や技術を中心に、情報や通信の分野で発展しているので留学生も非常に多い。

ヨーロッパからの人々も多く、ドイツ、フランス、スペイン、イギリスなどで、特に、金融機関からの派遣研修が主軸であるらしい。米ドルが国際通貨の基準となっているし、円も確かに強いが、円は国際間の決済に用いられる基軸通貨としての利用となると歯が立たないので、ユーロで勢いづきたいヨーロッパとしては、米国留学は納得のいく現象。韓国や中国は製造業、サービス業の発展が著しく、マレーシアやシンガポールは世界中の企業から注目を集めている。

ひとつ共通して言えることは、ここで会える人々は夢や目標を持っていること。老若男女問わず、よく勉強する。そして、国家や民族、宗教などを超えて、リベラルに話し合える文化を築いている。ケンブリッジ全体がそのような雰囲気包まれている感じた。

もちろん英語が共通言語になるが、人々はそれぞれの母語に強く影響されたアクセントで英語を話す。さらにアメリカ国内でも英語のバリエーションが豊富で、すべての州から学生が集まるこの地域ではいろいろなローカルアクセントを聞くことができる。まさに、自分の英語を自由奔放に話せる環境が出来上がっている。

英語を媒体として、知識や技術の修得に勤しみながらも、自分の思考を形にしてお互いの価値を擦り合わせながら共同で新たな価値を生み出していく。ここに学術都市の強さがあるのだろう。世界各地から積極的に人材を集めることによって成り立つ独特の空間と、自然に生成する異文化融合社会。そして見出す新たな知と技。

秋になり、ニューイングランド地方の見事な紅葉に接し、晩熟の葉っぱでも最後には落ちてしまう様に心を打たれながら、自分自身を顧みる。何回も己の枝葉を落としながら木は大きくなるのだ。自分はいつの間にか葉を落とすことや、成長することを、止めてしまっては

いないか。自分の頭ではなく、世間一般の常識の枠で思考判断してはいないか。自分よりも年齢を重ねた人でさえ学生として新たな分野に取り組んでいる姿を見るにつけ、自分の世界を小さくまとめようとしている己に気づき、一度、葉っぱを全部落としてみようかと考える。

半年間の研修で感じていること。まずは、「ことば」と「数」がもっとも重要かつ最大の威力を発揮する人間のインテリジェンスとなること。自分もレトリックの専門家であるが、ことばと数が融合してプラクティカルな場면을動かしていく様子を何度も体験した。自分が物事の仕組みを理解するのも、自分の思考を形にして表現していくのも、ことばと数の概念なくしては不可能。つまり、ことばと数を極めることこそが、何事にも応用可能な自由自在への道につながる。国際的に考えるのであれば、それはやはり英語と数学である。

次に、物事は常に異なるレベルで同時に思考すること。ミクロとマクロ、短期と長期などの言い方があるように、ひとつの事象について考える時に、複数のレンズを通して考察するほうがより良い結果をもたらすということだ。目の前にある問題、課題に取り組む時、どうしてもすぐに解決できる方法を模索してしまうが、少し大きめのコンテキストでそれを眺めてみるだけでも、解決方法が変わってくるし、長期的な改善につながる。この理屈についても様々な事例の中で学んだ重要な考え方だ。

しかし、もっとも強く感じていることといえば、もっと単純なこと。それは、国際人になりたいければ、「心を開く」ということ。言い換えると、自分の思うこと、感じること、考えることを、他の人に話すこと。単純なことではあるものの、人によっては心理的に抵抗があって難しいかもしれない。しかし、自分が心を開かなければ、誰も自分に心を開いてくれたりはしない。一見、喧嘩しているように見える議論でも、「相手が言っている内容」について批判している場合が多く、相手を撃破しているのではない。そうやって感想や意見、議論を交換する中から信頼や愛情が生まれ、国や文化を超えた友情が築かれていく。心を開いて話すということは、相手を信頼することと同じだからだ。

ボストンの歴史を紐解いていくと、建国や独立戦争の話になるが、それよりも今は、この地域に広く根付いている自由な風、異文化や外国人に寛容な社会、学術の力を信じてやまないアカデミズム。そして、街を彩る自然と芸術。そんなことを歴史的なボストンの街に感じ取っている。自分も影響を受けながら、少しは変化、成長してみたい。